



心理

2021 年度新規採用職員インタビュー

「話を聴いて、心に寄り添う」

所属

中央児童相談所 判定課

Q. 現在の仕事内容とそのやりがいについて教えてください。

A. 児童相談所は、18 歳未満の児童のあらゆる相談に応じる専門機関です。私は心理判定員として、主に児童との面接で話を聴いたり、知能検査などの心理診断業務を行ったりしています。

児童の話を聴き、どのような支援が必要か考え、実行していくことにやりがいを感じています。忙しいと残業が続くこともありますが、仕事で悩んだり行き詰まったりしたときは、先輩職員に相談するなどして、ストレスを溜め込まないように心掛けています。

Q. 福島県職員として、実現したいこと、目標としていることは何ですか。

A. 人との縁を大切にしながら、心理職として、困っている方の力になりたいと思っています。そのためにも、日々慢心することなく自己研鑽に努めていきたいと思っています。

Q. 県職員を志望した理由について教えてください。

A. 公認心理師法が成立され、前職の仕事をしながら資格の取得に向けて勉強をしていました。資格取得後は、専門性を活かした仕事がしたいと考え、県職員の心理職を志望しました。働きながらの勉強は大変でしたが、諦めずに挑戦してよかったと思います。



↑ 知能検査を行っている様子



Q. どうやって仕事を覚えていますか。

A. 所内研修や様々な外部研修を通して、児童福祉や面接技術など業務に関する知識を深めています。研修で学んだ知識を、OJT（On the Job Training）で、先輩職員と一緒に、実際に実務を経験しながら仕事を覚えています。

Q. あなたをキーワードで伝えるとしたら、どんな言葉が思い浮かびますか。

A. 「スタートライン」「オールド・ルーキー」「この道を行けば」「やっぱり猫が好き」「食べ歩き～孤独のグルメ～」



↑ 児童と遊びながら行動観察をしている様子

Q. 「スタートライン」「この道を行けば」について教えてください。

A. 令和3年4月に福島県職員としてのスタートラインに立つことができました。今まで、心理職の経験はなく、右も左もわからず、不安も強かった中で、先輩方に支えられ、ようやく1年が経とうとしています。私のように社会人経験を経て、福島県職員の受験を考えている方もいらっしゃると思います。また、転職の決心が付かずに、受験を躊躇している方もいらっしゃるかもしれません。

『この道を行けばどうなるものか 危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし』これはプロレスラーのアントニオ猪木さんが自身の引退試合で語った詩の冒頭です。詩の最後は『迷わず行けよ 行けばわかるさ』という言葉で締めくくられています。人は行動した後悔よりも、行動しなかった後悔の方が深く残ると言われています。悩んだときは行動に移すことで、気持ちが晴れるかもしれませんね。